

鹿角市史

第三卷 上

熊沢硫黄山

藩政期からさかんに採掘されてきた八幡平の硫黄山は、明治に入ってから時代をうけながら変転を繰り返すこととなった。その中心をなす熊沢硫黄山について、明治初期の状況をもっとも正確に述べているものに、一七年県庁へ報告された左の「民行鉱山志料取調」(約要)がある。

長谷川村熊沢硫黄山は、明治八年二月開業、借区坪数六五〇坪、稼人は長谷川村阿部藤助である。採掘方は鍬を用い、坑夫一人一日通常二四〇貫目程を出す。現在の一日使役高男一四人、この賃金二円八〇銭。製煉方法は、鉄釜に硫黄鉱を入れて煮、硫黄分が溢れ外へ流出し凝結したのを、鉄鍬で碎き再び釜に入れる。その熔解するを待つて布製の袋で漉し、また凝結したものを釜に戻して煮る。滓は底に残り硫黄分は上にでる。また釜で煮て、始めて純粹の硫黄を得る。硫黄鉱一〇〇貫目につき、硫黄二〇貫目程を製出する。また硫黄二貫四〇〇目を製するに、薪は三尺回り一把を用い、その代金は金五銭とする。

硫黄一箇一二貫目につき代金一元、販売地は盛岡でその運送賃金六〇銭、終始陸送で牛を使う。

二〇年六月阿部藤助は事業の拡張を図って、さらに硫黄坑の増借区を出願した。字熊沢ノ内小字湯沼に五、二七九坪二合、小字小屋ノ沢に二、六四八坪九合、小字中ノ沢に一、七七五坪五合を増区し、新旧坑区を合わせて一万〇、三三三坪六合とした。これらの坑区についてさらに二二年九月、開坑から一五年の期限をむかえることから「借区継年期願」を提出している。『見聞雑誌』二二年三月一四日の項に「昨昼専弥来りて硫黄山咄しせり、硫黄山下げに取掛り、谷内村より男女大勢にて、雪車にて行、長嶺よりは舟に積むの趣」と、その盛況ぶりを記している。なおこの二二年、『宮川郷土読本』年表に「熊沢硫黄山大爆発」、『鹿角のあゆみ』に「焼山の爆発によって硫黄の採掘がはじまっている」などの記事がある。

三〇年三月、熊沢硫黄山とやや距てた熊沢官林ノ内小字切留平に五万一、五〇〇坪、同官林小字五舁掛および玉川官林(仙北郡田沢村)ノ内小字曳分(ひきわけ)にまたがる九万九、五〇〇坪について、花輪町黒沢幸太郎が「硫黄鉱採掘特許願」を出願し、同年のうちに皆月善六へ名義の書換を行なっている。

三四年二月には、熊沢官林ノ内小字切留平ノ内隠居沼七万八、七〇二坪について、北海道函館区元町田中和三が「硫黄鉱試掘願」を出願。同年同月に、同じく小字切留平の内二万八、〇二〇坪について、函館区船場町田村力三郎が「硫黄鉱採掘特許願」を出願している。

坑区はすこぶる錯綜の様相を呈してき、右のほかにも前掲『鹿角のあゆみ』によると、三〇年五月函館小泉勇三郎が、後生掛大湯沼一帯に採取権をもち、妾・本妻、地獄谷等に排水溝を設けて粗鉱を採取し、気成鉱床のある場所に転々と釜を移動して、極めて高品位の製品を産したという。

「また三二年一〇月、東京市浅野総一郎が字切留平地内に、硫黄鉱区五万九、三三〇坪の特許を得、さらに三三年一月三万三、八二〇坪(小字湯沼、中ノ沢、)の増区を申請し合計九万三、一五〇坪で経営を行なった。三三年一月の秋田魁新報記事に「熊沢硫黄鉱は三十万円の見込にて諸工場に改良を加へ、又同山より扇田迄山用鉄道敷工事中でまもなく落成に至るべし」とある。しかしこの山用鉄道実用の話題は今に伝わっていない。また三五年三月の頃、同山に労働者五〇〇名許り団結し同盟罷工を起した事実があるという。硫黄山で五〇〇名という人数は、運搬従事者などすべてを入れてもなお考え難い数字に思われる。三六年四月の秋田魁新報は「浅野熊沢硫黄山、三菱飯戸硫黄山、皆月両国硫黄山の三鉱山あれども何れも皆休山となり」と記し、その後三七年一二月には「熊沢硫黄山が開け(活況をとり戻した)」と報じている。

なお『鹿角のあゆみ』には、四三年毛馬内町柳沢恒吉が、後生掛一帯に権利を取得して石飯戸鉱山とし湯沼、泥火山その他の低地を採掘、精錬所を澄川に設け焼取釜五枚をもって盛大に稼行した、と記している。